



東日本大震災からの 笠間焼の復興

鴨志田 武

1. 笠間焼の歴史と特徴

笠間焼は、江戸中期の安永年間（1772～1781年）に、箱田村（現在の笠間市箱田）の久野半右衛門が、信楽の陶工・長石衛門の指導で築窯したのが起源とされ、明治に入ってから、水甕や摺り鉢などの厨房用粗陶器の産地として知られていきました。

しかし戦後、生活様式の変化から、厨房用の陶器需要の減少する危機に直面し、1950年代には、窯元の数は8軒まで減少してしまいました。

県は1950年に笠間焼振興対策として窯業指導所を設立し甕や摺り鉢の大物製品から工芸陶器への小物中心への製品転換を進めました。一方で人材の育成に力を注ぎ全国に陶芸家の門戸を広げるとともに、製法や原料には制約をかけずに自由に工芸としての陶磁器を製造できる形で開放しました。この笠間の持つ「自由な雰囲気」に惹かれて、全国から陶芸を志す人間が次第に集まるようになり、現在では茨城県内で約390軒の窯元や工房があり約430名が焼物に従事しています。

現在の笠間焼は、全体的に生産規模は小さく、伝統的窯元の他に手作り作家志向の工房が多く自由な作風で生産しています。製品は、伝統的なものから民芸調、クラフト調、美術工芸品など個性豊かで斬新な意匠を凝らしたもので、多彩さと多様性が魅力であり、大量生産ではない手作りのオリジナル商品として売っている産地です。

また、首都圏から近いことから、観光と密着した年間を通じての催事、イベントを展開し、陶芸体験や作り手である作家が直接顧客と対話しながら販売する形が中心となっているのも特徴です。

2. 東日本大震災の被災状況

3.11の震災当日に窯業指導所では成果発表会があり、午後には研修成果発表と研修修了式が行われていました。

14時46分、発表が終わり修了証書を授与している時に地震が起きました。最初、ぐらぐらと来て治まるかと思いましたが揺れは大きくなるばかり、その内、天井の一部が落ち始め、これは危険だと感じ



震災で崩落した登り窯

全員で外に避難しました。その間も揺れは治まらず、周りの山を見ると、揺れて杉花粉が一斉に飛び真っ白です。周辺の地面は開いたり閉じたり地割れを起していました。建物の外面に貼られている大きなガラス壁面が大きく揺らいで今にも割れそうな勢いです。隣接する工芸の丘の登り窯ではレンガ積みの窯が大きく崩落しています。私自身も初めて経験する震度6弱の恐怖でした。これは大変な被害になるというのが直感でわかりました。その後、窯業指導所の笠間焼被害調査では人的被害や火災はありませんでしたが住居や工房の全壊、半壊が10%、一部損壊が40%と5割が被害を受けました。窯などの設備被害は半壊、一部損を含めて74%が被災しました。販売店や工房の商品および仕掛品の被害は90%となりました。また、焼物産地を象徴する登り窯や穴窯等の薪窯はほとんどが全壊の状態でした。

3. 復興に向けて

・陶炎祭（ひまつり）

陶炎祭は毎年GW期間に200軒以上の窯元や作家が出店する笠間焼最大のイベントであり2011年は30回を迎える節目の年でした。笠間には古いしきたりやしらが少ないからこそ、県内外から若い才能が集まってきた面があります。絶大な力を持つ窯元もなく、何ごとも作家と窯元が力を合わせてきた手作りの祭りから始まっています。主催する笠間焼協同



宮古市でめし碗を配布

組合は震災1週間後に祭りの開催決行を決めました。多くの窯元や陶房で窯や作品が損壊し、自粛ムードも高まっていたが同組合は「陶炎祭が中止になったら、笠間は復興できない」と決断しました。開催のPRに力を入れるとともに、福島県の大堀相馬焼や県産品販売ブースなどチャリティ色を押し出しての開催としました。作品被災での出店への辞退者は約1割にとどまり、192軒が熱意で集まりました。そんな熱意と来場者の復興支援の後押しもあり、過去最高となる38万人が訪れる結果となりました。

笠間焼協同組合の川野輪理事長は「笠間は9割以上が家内工業的にやっている。一人ひとりの意欲が大事。希望を持ってもらいたかった」と話しています。

・めし碗プロジェクト

今回の震災で笠間焼も大きな打撃を受けた被災地でしたが、さらに被害の大きかった東北被災地支援に自分たちにできることはないかと考えて始まったのが「めし碗プロジェクト」です。これは避難所や仮設住宅に暮らす人たちが、紙やプラスチックの容器で食事しているのを見て、せめて焼物のめし碗で食べてもらいたいとの想いから、めし碗を送ることを決めました。笠間焼協同組合が中心となり窯元、作家ができる範囲で手作りのめし碗を作り1万個を集めました。このめし碗は宮古市等の被災者に送られました。

・登り窯復興プロジェクト

損壊した登り窯の復旧を手伝いながら、笠間焼を学びたいというサポーターを募り首都圏を中心に80名



サポーターによる登り窯修理

が登録し「ボランティアの方も含めて、みんなで支え合って笠間を復興していければ」という想いでレンガの片付けや整備補助を職人と一緒になって作業を行っています。先日、ボランティアの協力により復旧した窯で初めての火入れが行われました。

・陶芸産地からの支援

東京国立近代美術館より茨城県陶芸美術館長に就任した金子賢治館長から旧知の岐阜県美濃焼の人間国宝である加藤孝造氏への声かけにより岐阜県的美濃陶芸協会および土岐市を通してレンガ、棚板、つく等の陶芸用の材料を義援物資として提供いただきました。この支援物資は笠間焼協同組合を通じて被災した陶芸家の方々に配布され大変喜ばれました。この支援は、お隣の益子焼に対しても同じように行われました。その他、今回の被災に対して全国の陶磁器産地より、イベントへの誘いや支援および激励を頂きましたことは産地との繋がりと、何よりの勇気となりました。

4. 今後の展開

復興に向けて歩み出した焼物の産地・笠間。これからの課題として原発事故に伴う放射能対策と風評被害の克服が重要な問題となっています。焼物の原料となる粘土や釉薬として使用する天然土灰および薪窯焼成で必要となる薪等、心配の種は尽きません。大震災を契機として新たな人と人とのつながりが生まれました。この結びつきをさらに強めて確かなものとして笠間の特徴である「手作り」、「オリジナル」を活かして更なる復興を進めていく覚悟であります。

■筆者紹介 鴨志田 武

茨城県工業技術センターにて金属材料の表面改質技術、アモルファス金属の研究や中小企業の技術支援に従事。その後、(株)ひたちなかテクノセンターにてJ-PARC等の中性子産業利用や茨城マグネシウムプロジェクトの立ち上げに従事、2010年より現職。

[連絡先] 〒306-1611 茨城県笠間市笠間2-346-3 茨城県工業技術センター 窯業指導所「匠工房・笠間」

E-mail : take@kougise.pref.ibaraki.jp

[投稿歓迎-編集委員会では「ほっと」spring欄への会員からの投稿を歓迎します。編集事務局までご一報ください。]